

# 4歳児クラスでの合意形成のための 話し合いにおける保育者の働きかけ

杉 山 弘 子\*

Pre-school Teacher's Positive Advice for Process of  
Agreement in Four Year Children's Talking

Hiroko Sugiyama

本研究の目的は、4歳児クラスでの合意形成のための話し合いにおける保育者の働きかけの特徴を考察することである。ある幼稚園の4歳児クラスで毎月の誕生会の前後に行われるおやつ作りのメニューを決める話し合いを継続的に観察し、VTRに収録して分析の資料とした。保育者の働きかけの特徴として、幼児の姿に合わせて働きかけを一部変えながら、合意形成のための話し合いの様式を繰り返し伝えることがあげられる。また、対話によって幼児のイメージを把握し、それを絵に表すことで具体化・共有化を図る、友だちとの相談によって思考を促進し、意思決定を支える、多数決で少数派となった幼児の自己制御を集団の中で認めることで励ますなど、この時期の発達を踏まえた働きかけを行っている。さらに、決定を急がず、多数決の結果についてもそれでよいのかを確認する、少数派の幼児の意思を確認するなど、合意を確かなものにするために確認を重ねることが特徴になっている。

キーワード：4歳児クラス、話し合い、合意形成、保育者の働きかけ

## 問題

幼児の保育では、生活や遊び、集団づくりを進める過程に、グループやクラス全体での話し合いを位置づけた実践が展開されている（東，2004；広瀬・磯部，2012；古庄，2011）。遊びのルールや行事への取りくみ、仲間同士でのトラブルなど、話し合いのテーマは多様である。いずれにしても、話し合いは、自分の意思を表明し他児の意思を聞き取りながら、生活や遊びを仲間と共に豊かにしていくための重要な活動と考えられる。

石橋（1988）は、幼児期の話し合いの展開には保育者の意図的指導や援助が必要であると述べる。保育者の働きかけの重要性を指摘するものであるが、その内容は、幼児の年齢や話し合いのテーマ、参加人数によって違ってくるであろう。本研究では、ある幼稚園での協同活動に向けたクラス全体での話し合いを取り上げる。この幼稚園では、毎月の誕生会の前後にクラス単位でおやつ作りに取りくむが、そのメニューは各クラスでの話し合いによって決められる。

---

2013年9月9日受理  
\* 尚綱学院大学 教授

そこでの保育者の働きかけに焦点を当てる。

筆者はこれまでも、同幼稚園の3、4、5歳児クラスで、おやつメニューを決める話し合いを観察し、合意形成過程における保育者の関わりを研究してきた(杉山, 2011a・2011b・2011c)。いずれの年齢でも話し合いの進行役は保育者であった。3歳児クラスでは、保育者が一人ひとりに発言の機会を作り出すことにより、幼児は話し合いに参加していた。また、楽しい活動(おやつ作り)を具体的にイメージできるような話し合いの展開により、幼児は自分の意見とは異なる多数決の結果を受け入れていた(杉山, 2011b)。4歳児クラスでは、意見交換の有無や幼児の意見の内容は保育者の働きかけに依存していることがわかった(杉山, 2011c)。また、5歳児クラスでの保育者の働きかけは、意見を出し合い、聞き合うことで幼児が行動を選び直す機会を作り出す方向へと向かっていた(杉山, 2011a)。

しかし、これらの研究は、年間の3つの時期(前期、中期、後期)の話し合いを資料とするものである。原則として月1回行われる同テーマでの話し合いの全てを資料とするならば、合意形成のための保育者の働きかけの特徴をより明確にできるのではないかと考える。そこで、今回は、4歳児クラスで毎回の話し合いを観察することにした。

ここで、4歳児クラスでの話し合いについて考えてみる。4歳児では、「話しことばでおたがいの経験を交流させ、イメージを共有しながら、共同で活動することが喜びになる年齢」なので、さまざまな話し合いが可能になると言う(岡・中川, 2011, p.109)。4歳児クラスには4歳から5歳の幼児が属するが、4歳児は友だちとの会話が盛んな時期であると言われる(津守・磯部, 1965, p.210)。また、保育所保育指針(平成20年告示)は、おおむね4歳では仲間とのつながりが強くなること、おおむね5歳では「言葉により共通のイメージをもって遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える」ことに言及している。これらのことから、4歳児クラスでの話し合いは、仲間との会話を楽しみ、それによってイメージを共有することが協同活動へとつながるこの時期の発達にふさわしい活動になりうると考えられる。

しかし、クラス全体での話し合いの成立と展開は、保育者によって支えられていることが示唆されている。野呂・杉山(1999)の観察によれば、保育園の4歳児クラスの話し合いでは、保育者がその全過程をことばですじみちを立てながら導いていたと言う。前述の通り、杉山(2011c)も、4歳児クラスでの話し合いの展開は保育者の働きかけに依存することを報告している。話し合いで合意を形成するためには、参加者が意思を表明し合い、時には調整し合うことが必要になるが、保育者はその過程を幼児の発達や状況に応じて支えていると考えられる。本研究の目的は、前述の幼稚園での観察を通して、4歳児クラスでの合意形成のための話し合いにおける保育者の働きかけの特徴を考察することである。

## 方法

1. 対象 観察の対象は、S幼稚園の4歳児クラスの幼児と担任の保育者である。観察開始時のクラスの構成は、幼児18名(男児9名、女児9名)と担任の保育者1名、保育補助1名であった。その時の幼児の平均月齢は54.8カ月(範囲:49~60カ月)で、その後、6月に女児1名、7月に男児1名が加わった。3歳児クラスからの進級児は6名で、他は4歳児クラスからの入園である。観察日ごとの幼児の出席人数は表1の通りである。

2. 日時 観察は、2011年5月から2012年2月の時期に、午前11時頃からのクラスの集

まりの時間帯に行われた。観察日と時間は表1の通りである。

3. 場所 観察の場所は、クラスの保育室である。

4. 場面 毎月の誕生会の前後に行われるおやつ作り（4月分から2月分までの11回）のメニューを決める話し合いの場面を観察した。担任の保育者とメモ用のボードを正面に幼児がコの字型に着席している。

5. 手続き 話し合い場面でのクラス全体の様子を2台のVTRに収録し、話し合いの進行に関わる保育者および幼児の言行を書き起こして分析の資料とした。

6. 倫理的配慮 本研究の実施にあたっては、尚絅学院大学人間対象の研究・調査に関する倫理審査委員会の承認を得た。また、幼稚園の了解のもと、園児の保護者に研究の趣旨を文書で説明し、書面で同意を得た。

## 結果

年度当初は12回のおやつ作りが予定されていたが、3月分のおやつ作りは事情により中止となった。そのため、観察できたのは11回分のおやつを決める話し合いである。その内、2回分は2日に分けて行われた。保育者は毎回、幼児にメニューの提案を促し、出された案（5～14個）の中から1つに決める流れを作っていた。決定方法は原則として多数決が用いられた。提案数と決定されたメニューは表1の通りである。

表1 話し合いの概要

回	誕生会	観察日	出席人数	時間	提案数	決定されたメニュー
第1回	4月分	2011年5月12日	17	14分40秒	9	アイス
第2回	5月分	2011年5月26日	17	33分40秒	7	パフェ
第3回	6月分	2011年6月15日	19	36分56秒	14	アイスクリーム
		2011年6月17日	19	22分5秒		
第4回	7月分	2011年6月30日	19	29分40秒	9	かき氷
第5回	8月分	2011年8月29日	19	24分27秒	6	かき氷
第6回	9月分	2011年9月21日	19	23分13秒	11	ピザ
第7回	10月分	2011年10月18日	20	23分22秒	5	クッキー
第8回	11月分	2011年11月21日	18	39分20秒	12	チョコレートケーキ
第9回	12月分	2011年12月5日	19	30分22秒	7	カレー
第10回	1月分	2012年1月25日	18	38分5秒	11	ゼリー
		2012年1月26日	19	6分21秒		
第11回	2月分	2012年2月8日	20	34分18秒	10	キャラメルポップコーン

第5回はグループ単位での決定を含みながら展開された。第5回以外は、全体の中で一人ひとりが意思表示をし、その結果をもとにメニューが決められていた。以降は、第5回を除く10回分を分析の対象とする。

分析に当たっては、合意形成に向けて話し合いを進行する保育者の働きかけを、年間を通して見られる働きかけがあるのか、時期による変化があるのかに視点をおいて見ていく。また、多数決で少数派となった幼児への働きかけにも注目する。

## 1. 話し合いを進行する保育者の働きかけ

保育者の働きかけの内、合意形成に向けて話し合いを進行する働きかけを取りだした。観察期間を通して見られた働きかけとして、10回中8回以上で観察された働きかけを基本的な働きかけと呼ぶことにする。基本的な働きかけとその他の働きかけ（7回以下での観察）は下記の通りである。また、各働きかけがどの回で見られたかを表2に示した。

### <基本的働きかけ>

- ①おやつメニューを決める話し合いをすることを伝える。
- ②提案を促す。
- ③提案されたメニューがどのようなものかを幼児たちとやりとりしながら絵にする。
- ④出された案の中から選ぶことを伝えたり、確認したりする。
- ⑤提案したり案の中から選んだりする際、何がよいかを友だちと相談するよう促す。
- ⑥賛成の案への意思表示を促す。
- ⑦多数決でよいか等、決め方を確認する。
- ⑧多数決の結果を伝え、それでよいか、合意を確認する。
- ⑨決定を伝える。

### <その他の働きかけ>

- ⑩どれがよいかを考えるように言ったり、考える時間をとったりする。
- ⑪案数を減らしていく（賛成者が0～2人の案を候補からはずしたり、2つの案を合体させたりする）。
- ⑫2段階に分けて選ぶ（案をグループ化し、どのグループがよいかを選び、その中から1案を選ぶ）。
- ⑬一人1回の挙手を求める（一人1回だけ手を挙げるように言う、一人1回手を挙げているかを確認する等）。
- ⑭少数派の幼児の異議を受けて調整する。
- ⑮少数派の幼児を集団の中で認める。
- ⑯少数派の幼児の意思を確認する。

表2 働きかけの状況

	第1回	第2回	第3回	第4回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回
①話し合いの提起	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②提案を促す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③メニューを絵にする	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④出された案から選ぶ確認	○	○	○	○			○	○	○	○
⑤友だちとの相談を促す	○	○	○	○		○	○	○	○	
⑥賛成の意思表示を促す	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦決め方を確認する	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧合意を確認する	○	○	○	○			○	○	○	○
⑨決定を伝える	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑩考えるように言う			○	○	○	○	○		○	○
⑪案数を減らしていく			○		○	○	○	○	○	○
⑫2段階に分けて選ぶ			○	○						○
⑬一人1回の挙手を求める						○	○	○	○	○
⑭異議を受けて調整する		○					○			
⑮少数派を認める			○	○			○			
⑯少数派の意思を確認する								○	○	

注) ○は、働きかけがあったことを示す。

## 2. 時期による働きかけの変化

### 1) 意思表示の方法

基本的働きかけは年間を通して観察されたものであるが、⑥の賛成の案への意思表示を促す働きかけの内容には、時期による違いが見られた。第1回は挙手による複数選択（事例1）、第2～4回は賛成する案の絵を置いた場所に集まる方法（事例2）をとる。第6回以降は挙手による意思表示の方法をとるが、第7～11回では一人1回の挙手を求めている。

#### 事例1 複数選択で賛成者の多い案に決める（第1回、5月12日観察）

保育者は食べたいものに手を挙げるように言い、9案について順次、「○○食べたい人？」と聞いていく。複数の案に手を挙げる幼児がいるが、保育者はそれについて何も言わない。最後にアイスについて尋ねると、3分の2ほどの幼児が「はい」と挙手をする。保育者は、アイスに賛成する声が一番大きかったと思うと言い、もう一度「アイスが食べたい人？」と聞くと、幼児たちは再び大きな声で「はい」と言って手を挙げる。保育者は同様のやりとりをさらに繰り返した後、「じゃ、アイスに決定でいいですか？」と問うと、幼児たちは「うん」と答える。保育者が「アイスに決定です」と言って拍手をすると、幼児たちも「いはい」と言って拍手する。

#### 事例2 食べたいものの絵の所に集まる（第2回、5月26日観察）

保育者が出された案の中から選んでよいかを問いかけると、幼児が1枚の紙に描かれた絵を案ごとに切り分けて選べばよいと言う。保育者は時間がかかるのでそのまま絵を見て選んでいこうと言う。 <中略> 保育者は「○○が食べたい人？」と、複数選択の挙

手で聞いていく。全部聞き終わったところで、「同じくらい手が挙がりました。こないだ(第1回)とちょっと違うね。」と言い、どうやって決めようかと問いかけると、絵を切ってやればよいという意見が幼児から出される。そこで、案ごとに絵を切り分け、ばらして置き、食べたいものの絵の所に集まることにする。

第6回では、決め方を問いかけた保育者が、「多い人」という幼児の発言を受けて、「手を挙げてみて多い方になったメニューでいいですか?」と問い、幼児が「うん」と応答したことから、挙手での意思表示が採用される。第7回以降の一人1回の挙手を求める働きかけには2つの側面があった。一つは、手をあげる回数の制限で、2回手を挙げた幼児には、どちらか1つを選ぶよう働きかけている。二つ目は、全員が意思表示することを求めるものである。第10回では、どれか1つを選ぶことができない幼児のために考える時間をとり、次の日、もう一度話し合いをもつことにしている。一方、第2回と第3回で選択の意思表示をしない幼児(同一の1名)に対しては、個別に意思を尋ねたりするが、選ぶまで働きかけ続けることはしていない。

## 2) 合意の確認に至る道筋

合意の確認に至る最終盤の進め方について、第1～2回と第3回以降とに違いが見られた。第1回は事例1の通り、賛成の案への意思表示の後、保育者がある案への賛成の声が一番大きかったと伝え、その案でよいかを尋ねて合意を確認している。第2回では、賛成の案への意思表示の後、保育者が賛成者の一番多い案に決めてよいかを尋ねている(事例3)。

### 事例3 意思表示後、賛成者の一番多い案でよいかを尋ねる(第2回、5月26日観察)

幼児が好きなメニューを描いた絵の所に集まる。保育者が幼児からの提案を受けて、賛成者の一番多いメニューに決めてよいかと全体に尋ねる。ダメという幼児の声もあるが、保育者は、今回はいろいろな所にばらばらになったので多い所で決めようと思うと言う。一番賛成の多かったパフェには、少数派の提案にあるいくつかの食べ物ものせられることを話し、これでよいかと尋ねると、幼児から「うん」という応答がある。しかし、保育者がパフェに決定すると言うと、嫌だという幼児が出てくる。そこで、保育者は、その幼児が提案したブドウケーキのブドウも入れられることを絵に描いて示し、合意を確認する。

それに対し、第3回以降では、多数決でよいかを確認してから、賛成の意思表示を促している。第6回と第7回では、多数決でよいかを確認し、賛成の意思表示を促し、多数決の結果を決定として伝えている。その他の回では、多数決での結果を決定として伝える前に、その結果を決定としてよいかを尋ねて合意を確認している(基本的働きかけの⑧)。

## 3. 少数派の幼児への働きかけ

### 1) 少数派の異議を受けた調整

多数決の結果を決定とすることに少数派の幼児が異議を唱える例が2例見られた。1例は事例3の通り、第2回に観察されたものである。保育者は、決定しようとしているメニューが異議を唱えた幼児の要求も取り入れたものにできることを示すことで合意を得ている。

もう1例は、第8回に観察されている（事例4）。保育者が多数決の結果を伝えて、それでよいかを尋ねると、異議が出される。保育者は、幼児の反対理由と自身の考え方を全体に伝えながら、幼児たちに意見を聞いている。やりとりの結果、異論の出た案をはずして選び直すことになる。

<事例4> 多数決の結果に異議が出され、選び直す（第8回、11月21日観察）

保育者は、挙手の結果、餅への賛成者が多かったことを確認し、「お餅になりました」と言うが、「餅でいいですか？」とさらに問いかける。すると、ダメという幼児が出てくる。餅が食べられないと言う。誕生会のおやつ作りだからみんなが食べられるものがよいかかもしれないがみんなはどう思うかと保育者が問うと、幼児から「やめる」、「別なのにする」、「譲ってあげる」という声が出る。保育者は餅を案から外すことを確認し、残った2案から選び直す。

2) 少数派を集団の中で認める

多数決の結果に異議の出ない場合において、少数派の幼児を集団の中で認める働きかけが3例見られた（事例5～7）。

<事例5> 「がまん」を集団の中で認める（1）（第3回、6月17日観察）

多数決で決めることを確認した後、幼児は好きなメニューの絵の所に集まる。保育者は16対3でアイスが多いことを伝え、アイスに決定してよいかを確認する。保育者がアイスに決定することを伝え拍手をすると、幼児から「ヤッター」の声が上がる。それに対し、少数派の幼児の一人が「うるさーい」と言う。保育者は少数派の3人を前に呼び、3人は別の案を選んだが人数が多い方に譲ってくれたこと、ちょっと自分の気持ちをがまんしてがっかりした顔をしていることを全体に伝える。それでも多い方に譲ってくれた3人に拍手しようと言うと、幼児が拍手をする。

<事例6> 「がまん」を集団の中で認める（2）（第4回、6月30日観察）

保育者は、かき氷が多かったのかき氷にしてもよいかと保育者が言ったとき、少数派の2人が「いいですよ」と言ったことを全体に伝える。本当はアイスが食べたかったことを2人に確認し、「がまんしました」、「すごいね。みんなで拍手しようか」と言って拍手を促し、2人に「ありがとう」と言う。

<事例7> 「譲ってくれる」ことへの感謝を集団の中で伝える（第8回、11月21日観察）

多数決の結果を伝え、それでよいかを確認した後、保育者が、少数派の6人に立ってくださいと言う。6人が立つと、「このお友だちは、本当は鍋がよかったんだけど譲ってくれるんだって。ありがとね。また今度の時、お鍋も考えてみようね」と全体の中で言う。

3) 少数派の意思を確認する

多数決で決めることを確認して意思を集約し、多数決の結果を伝えた後、少数派の幼児に対

して多数決の結果でよいかを尋ねる働きかけが 2 例見られた。事例 8 はその内の 1 例である。

〈事例 8〉 多数派の案でよいことを少数派に確認する（第 10 回、1 月 25 日観察）

多数決で決めることを確認し、挙手で意思表示をすると、18 対 1 でゼリーへの賛成者が多い。保育者はゼリーが多かったことを全体に伝え、少数派の A 児にゼリーでも大丈夫かと問うと A 児が頷く。保育者は再度、大丈夫かと問い、譲ってくれるのかと問うが、A 児はいずれにも頷く。保育者は A 児に「ありがとう」と言う。

### 考察

これまで見てきた結果をもとに、4 歳児クラスでの合意形成のための話し合いにおける保育者の働きかけの特徴を考察する。

#### 1. 話し合いの様式を伝える

基本的働きかけは、おやつメニューを決めるという話し合いのテーマを提示してから決定に至るまでの一定の手続きを構成している。野呂・杉山（1999）は、「話し合い活動を意識的、継続的に保育の中に位置づけることにより、4 歳児クラスは、話題を共有して友だちの発言を聞き自分も話す、一緒に考えるという話し合いが成立に向かう時期と言えるかもしれない」と述べている。同じテーマでの話し合いを一定の流れで繰り返かえし経験することは、4 歳児クラスの幼児にとって、合意形成のための話し合いの様式を身につけていくことにつながると考えられる。保育者は、年間を通して話し合いの様式を伝える働きかけをしていたととらえることができる。

#### 2. イメージの具体化・共有化を支える

保育者は、幼児から提案がある（メニューを言う）と、それがどのようなものかを聞き取りながら絵を描いていく。他の幼児もその過程を見守っている。前述のように、4 歳児クラスは、会話によってイメージを共有することが協同活動につながる時期と考えられる。保育者は参加者を代表して提案者とやりとりし、そのイメージを絵にすることによって具体化し、クラス全体でイメージを共有できるよう支えていると考えられる。

#### 3. 思考を促進し、意思決定を支える

保育者は、幼児が何がよいかを選ぶ場面で、考えるように言うだけでなく、友だちと相談することを促す働きかけを 10 回中 8 回で行っている。津守・磯部（1965）は、4 歳児について、「他の子どもと考えの交流をすることによって、想像が発展し、刺激をうけ、製作活動が発展する」と述べている（p.208）。この記述は、友だちとの意見の交換が 4 歳児の思考を活性化することを示唆している。

礪波・三好・麻生（2002）は、幼児同士（ペア）での共同意思決定過程の特徴として、両者の意見が一致してもそれが共同意思になるとは限らないことをあげている。そして、この特徴には幼児の言動が変わり易いことが関係しており、個人の意思は個人内で決定されるのではなく、他者との対話的「場」の中で揺らぎながら生成されていくものであると考察している。友



だちとの相談は、他者との対話的な「場」をもつことに相当し、個々の幼児が自分の意思を決定することを支えていると考えられる。

#### 4. 幼児の姿に合わせて、話し合いの様式を伝える

次の2点について時期による働きかけの変化が見られた。1点目は意思表示の方法についてである。複数の中から1つを選んで挙手で意思表示ができるまでの過程を3段階に分けて踏んでいく。2点目は合意の確認に至る最終盤の進め方についてである。賛成の意思表示の後に多い方でよいかを尋ねるやり方から、決め方を確認してから賛成の意思表示をするやり方に変えている。幼児の姿に合わせて、「決め方を確認し、一人1回の挙手で意思表示をして合意の確認に向かう」という様式に近づけようとしているものと考えられる。

#### 5. 合意を確かなものにする

通常、多数決で決めることを確認して採決すれば、その結果が決定となる。しかし、本研究では、10回中8回で、多数決の結果を決定としてよいかを確認する働きかけが見られた。その結果、異議が出されて選び直すことになった回もあった。その他、少数派の幼児の意思を確認する働きかけも見られる。保育者はこのような進行により、合意を確かなものにしようとしていると考えられる。

#### 6. 少数派の自己制御を励ます

多数決が採用される中で、少数派の幼児が「がまん」したことや「譲ってくれる」ことを集団の中で認める働きかけが見られた。田中・田中（1986）は、4歳後半になると、「ほくのだケレドモ貸してあげる」などといった自制心が芽生えると言う。また、自分が理由の主人公になって納得するようになる」と述べる。すなわち、「カエタゲル、ダッテ、カワイソウ」などと主張の根拠がはっきりしてくる」と言うのである（p.24）。このような時期にあつて、上記のような働きかけは、少数派の幼児の自己制御を励ます意味をもっていると考えられる。

以上のことから、4歳児クラスでの合意形成のための話し合いにおける保育者の働きかけの特徴として、幼児の姿に合わせて働きかけの一部を変えながら、合意形成のための話し合いの様式を繰り返し伝えていることがあげられる。また、対話によって幼児のイメージを把握し、それを絵に表すことで具体化・共有化を図る、友だちとの相談によって思考を促進し、意思決定を支える、少数派の自己制御を集団の中で認めることで励ますなど、この時期の発達を踏まえた働きかけを行っていると言える。さらに、決定を急がず、多数決の結果についてもそれでよいのかを確認する、少数派の幼児の意思を確認するなど、合意を確かなものにするために確認を重ねることが特徴になっていると考えられる。

## 文献

- 東 麗子 (2004) 話し合いを中心にした5歳児のグループ活動. 季刊保育問題研究, 206, 96-100
- 広瀬雅美・磯部あさみ (2012) とくみ合いのケンカから話し合いへ. 季刊保育問題研究, 254, 96-99
- 古庄範子 (2011) 話し合い……自分たちで考えて～5歳児クラスの集団づくり～. 季刊保育問題研究, 248, 138-142
- 石橋由美 (1988) 保育所4, 5歳児クラスの話し合い活動. 日本保育学会第41回大会研究論文集, 4-5
- 野呂アイ・杉山弘子 (1999) 幼児の話し合い活動についてⅣ－4歳児の話し合い場面における保育者－子ども関係－. 尚綱女学院短期大学研究報告, 46, 23-30
- 岡 喬子・中川かをり (2011) 集団づくりの実際. 大阪保育研究所編, 子どもと保育 4歳児 改訂版. かもがわ出版, pp.107-116
- 杉山弘子 (2011a) 幼稚園の5歳児クラスにおける話し合いの展開－合意形成過程における保育者の関わり－. 尚綱学院大学紀要, 61・62, 63-74
- 杉山弘子 (2011b) 幼稚園の3歳児クラスにおける話し合いの成立と展開－合意形成過程における保育者の関わり－. 東北教育心理学研究, 12, 13-21
- 杉山弘子 (2011c) 幼稚園の4歳児クラスにおける話し合いの展開－合意形成過程における保育者の関わり－. 尚綱学院大学紀要, 61・62, 1-10
- 田中昌人・田中杉恵 (1986) 子どもの発達と診断4 幼児期Ⅱ. 大月書店
- 礪波朋子・三好 史・麻生 武 (2002) 幼児同士の共同意思決定場面における対話の構造. 発達心理学研究, 13, 158-167
- 津守 真・磯部景子 (1965) 乳幼児精神発達診断法－3才から7才まで－. 大日本図書

## 付記

研究にご協力いただいた幼稚園の関係者のみなさまに深く感謝を申し上げます。

また、本論文はその一部を下記の通り、日本発達心理学会第24回大会において発表している。

- ・杉山弘子 (2013) 4歳児クラスにおける合意形成のための保育者の働きかけ. 日本発達心理学会第24回大会論文集, 184